



# 都人も拜んだ？馬頭観音



## 冠着山・古峠越えの古道復元

左の写真は、冠着山北側の尾根筋「古峠」のすぐ下にある馬頭観音（体高約80センチ）です。江戸時代の明和年間（1764〜72）に造られた。馬頭観音は観音様の頭上に馬の頭をいただし、慈悲の強さを表し、荷物の運搬や移動には欠かせない馬の供養と結び付き信仰されるようになりまし。見る方向で表情が変わりますが、この写真だと馬は笑っているようにも見え、両手の平を胸元で心を籠めて合わせている観音様の姿とあいまって大変慈悲深さを感じます。

古峠は奈良や平安の都から信濃国に通じていた古代の国道、東山道の日本海に抜ける支道（シリーズ31、33、34参照）が通っていたとされます。都人はここで「ついにあこがれのさらしなに着いた」と感動したでしょう。地元では鉄道や車のない時代、薪取りや物資の運搬などに利用されてきました。この馬頭観音があるのはその道中、ワタクボ（長野県千曲市羽尾、旧更級村）と呼ばれる地籍で、急峻な山中に屹立している巨岩の懐の中に抱かれるように鎮座しています（写真上）。手前の二つの観音様と三体セットで並んでいます。岩の近くには広場もあり、馬も休ませていたのだと思います。

歩く人がいなくなり荒れていたこの道を6月21日、地元住民の「冠着山の自然と文化遺産を保存する会」（塚田勝寿会長）が藪を払い、倒木を片づけたり、崩れた道を直したりして復元させました。案内標識や解説板も設置。さらに歩きやすいように整備を進める予定です。



長野県千曲市御籠集落（旧更級村）など、善光寺平が望める古峠で、古道の復元作業に参加した「冠着山の自然と文化遺産を保存する会」のみなさん。左のポートが東山道支道についての解説板。